



農業が支える日本経済

栃木県・栃木県立宇都宮白楊高等学校 3年 和久井 瞳

「いらっしゃいませ」と私は大きな声でトマトを販売するのが大好きだ。私は栃木県の農業高校に在学しており、作物についての栽培技術の知識や農業経営などを実習を通して学んでいる。高校の専門の授業では、農業実習があり、そこで野菜の栽培や研究に励んでいる。できた野菜は私たちが大きさや型で選別し、袋に入れて値段を決め、校内で生徒や先生たちに販売実習をする。特に、メロンやトマトはすぐに完売となってしまうほどの人気である。私は高校で農業について学ぶまでは、農産物が店頭並ぶ前の過程について、考えたことはなく、「低価格・量が多い」という理由で商品を選択していた。しかし、高校に入学し農業の知識が増え、実際に自分たちで育てた野菜を販売することになってから、店頭で自分が手にする野菜の生産地や生産者、栽培方法について、興味を持つようになった。私たち消費者にとって、お店に並んでいる多くの作物の中から、自分の要望に適したものを選択し、買うという動機につながる過程は、とても重要なことであり、様々なことと深くつながっていることを知った。

農産物価格の特徴は、作物が小規模の生産者によって供給されるため、市場で少数の人数で取引される場合、価格は安定するが、市場の独占が生じやすいといわれる。そのため、せっかく、農家が個性を発揮して差別化した農産物が余り、市場では高値で取引されにくいのである。また、逆に、多数の場合は競争が働き、独占が生じにくい、価格が変動しやすいのである。高原キャベツなどの産地で生産調整をしているニュースがその例である。また、輸入農産物には、国産品より極端に安い場合、その差を少なくするために関税がかけられている。この制度は多くの農産物で輸入制限があったが、次第に規制がなくなり、貿易の自由化が進められてきたのである。

現在、日本のTPPへの加入締結の交渉が最終段階にある。TPPに加入すれば、米や麦をはじめとして、乳製品や牛肉や豚肉などで安価な農産物の輸入量が増

え、日本の農業が危機に直面するのではないかと考えられている。その問題は農業高校で学ぶ私にとっても、大きな関心事となっている。私の住む栃木県にも苺の「とちおとめ」や「スカイベリー」、梨の「にっこり」や「おりひめ」、その他たくさんのブランドがある。これらのブランド作物は消費者の要望に沿って県が中心となり、開発されたものである。今年、1月7日の日本農業新聞の「2015年農畜産物トレンド調査」^{注)}の結果では、販売キーワード部門の第1位は「おいしさ」、第2位は「安全・安心」、第3位は「健康」、第4位は「低価格」、第5位は「国産」という内容の記事を読んだ。私は消費者が何を求めて農産物を求めているか理解するとともに、このキーワードをすばやく経営改善に結びつけて、取り組んでいかなければならないと思った。

日本では稲作や園芸、畜産などの法人経営や大規模家族経営、新規就農者、農業への参入企業など、地域の多様な担い手の農業者が取り組む規模拡大のため、コスト削減、6次産業化や生産物の高付加価値化を進めている。また、こうした経営改善に一体的に取り組みたいと考えている加工・販売事業などや就農を希望する人には青年就農給付金制度というものがある。また地震、台風といった自然災害や家畜伝染病、農産物の価格下落、飼料価格の高騰などの影響により、一時的に経営が悪化した農業者の人に長期運転資金をはじめとする融資の支援を行っていることなど、様々な政策がある。このような日本の農業を守り、支える制度があることを調べて、私はTPPへの参入により、逆に日本の農業を取り巻く経済は、今より良くなるのではないかと考えている。海外の作物が市場に大量に出回るようになれば国産でより良いものを、消費者が求め、そうした農産物を生産する農家が多く現れて日本の農業が活発になるのではないかと。技術立国の日本ならではの、データに基づいた管理方法、理論的に構造改革する努力を進めれば、海外にも負けない高品質の生産が可能になることは困難ではないはずだ。

海外の農業は広大な土地、機械化、システム化、ロボット化、溶液栽培などの点において、日本よりはるかに進んでいる。しかし、日本の農業の良さは四季の変化を上手に利用して、お日さまと共に土壌や作物に向き合い、自然と親しむことができるということだ。日本は自然が豊かでミネラルを豊富に含む水があり、それによりおいしい作物が作れるのである。日本におけるTPP問題の帰結

として、最近の有機質栽培や無農薬栽培などに注目したい。この農法に力を入れ、安全安心でおいしい作物が普及していることが日本の農業の強みだと私は考える。TPPにより海外の作物が輸入されてきても、このような良さを消費者に知ってもらい、低価格という理由で作物を選ぶのではなく、品種本来の本質を見極めて選択するという消費行動をもっと多くの人に実行してもらいたい。

農業の魅力と面白さは世界共通である。食料を生産することもさることながら毎日の作業に発見と驚きがある。新たな視点を持って農業を営むことは非常に面白く、自分の技量が試されるものといっても良いだろう。私は高校3年間、農業について学び経験したことで、農業に対するエネルギーは膨大で、発展する可能性が、無限大にあると思うようになった。農業は私たちが生きていくためには欠かせない作物を生産してくれるものである。生産から販売までの過程に多くの金融機関や企業が関わりあうことで、農家の人たちはお金を手にする。収穫した作物の売上金は、生活費や次の生産の資金に使う。つまり、販売利益から次の作物を生産するための資金につながり、それによって生産された作物を私たちが購入し、食すことができる。これはまさしく、農業による経済の循環である。見えないところで農業は経済を支えているのである。

生産から流通、販売というサイクルに興味や関心を抱いた私は、将来日本の農業に自ら携わっていき、地域の農業に貢献していきたいと考える。そして、今、思うことは農業による経済の影響は未来を明るくしてくれるということだ。自然を相手に食料の生産という仕事を通して、様々な面で、多くの人々をつなぎ、社会に金が流通することにより、国民の生活を支え、それが社会を安定させる。私は農業を通して、自然の豊かさや作物のありがたさを知った。見えないところで経済に貢献している農業を支えていきたい。そして、日本の農業が発展することで、日本の経済が活性化されることを期待していきたい。

(注) 日本農業新聞 2015年1月7日 「2015年農畜産物トレンド調査」